敬意の方向 確認テスト（誰から誰へ）　解答・解説

■ 解答・解説

問1 (1) 尊敬語／(2) 作者から帝へ。「御覧ず」は「見る」の尊敬語で動作主（見る人）＝帝を敬う。地の文なので敬意の主体は作者。

問2 （例）帝が月を御覧になる。／帝が月をご覧になる。

問3 作者から帝（宮中の主）へ。「参る」は「行く・参上する」の謙譲語で、参上する先＝宮中の主である帝を敬う。地の文なので敬意の主体は作者。

問4 (1) 尊敬語／(2) 翁からかぐや姫へ。「たまへ」は尊敬の補助動詞で動作主＝出て行く人＝かぐや姫を敬う。会話文なので敬意の主体は話し手の翁。

問5 作者から母君へ。「奉る」は「与える」の謙譲語で、動作の受け手＝文を受け取る母君を敬う。地の文なので主体は作者。

問6 （例）（姫君が母君に）文を差し上げなさる。「奉る」は「与ふ」の謙譲語で「差し上げる」の意。

問7 (1) 丁寧語／(2) 大納言から帝へ。「はべり」は丁寧語で聞き手を敬う。会話文なので主体は話し手の大納言、聞き手は帝。

問8 抜き出す語…「たまへ」。中将から女房へ。「たまへ」は尊敬の補助動詞で動作主＝琴を弾く女房を敬う。会話文なので主体は話し手の中将。

問9 作者から仏へ。「申す」は「言ふ」の謙譲語で、経を申し上げる相手＝仏を敬う。地の文なので主体は作者。

問10 (1) 謙譲語／(2) 君から（その場の相手・聞き手側＝行き先の人）へ。「まかる」は「行く・退出する」の謙譲語で、向かう先・退出する場の貴人を敬う。会話文なので主体は話し手の君。なお「まかる」は丁寧語的に聞き手への敬意とする説もあるが、ここでは謙譲語として動作の及ぶ相手への敬意ととる。

問11 （例）私はその所へ参りましょう（退出しましょう）。「まかる」＝参る・退出する、「な」「む」で完了＋意志「きっと〜しよう」。

問12 作者から帝へ。「遣はす」は「やる・つかわす」の尊敬語で動作主＝御使ひを遣わす帝を敬う。地の文なので主体は作者。

問13 翁から客人へ。「侍り」は丁寧語で聞き手を敬う。会話文なので主体は話し手の翁、聞き手は客人。

問14 作者から帝（内裏の主）へ。「参る」は謙譲語で、参上する先＝内裏の主（帝）を敬う。地の文なので主体は作者。

問15 作者から帝へ。「たてまつる（奉る）」はここでは「差し上げる」の謙譲語で、御文を差し上げる相手＝帝を敬う。地の文なので主体は作者。

問16 (1) 尊敬語／(2) 女房から姫君へ。「御覧ず」は「見る」の尊敬語で動作主＝御覧になる姫君を敬う。会話文なので主体は話し手の女房。

問17 翁から聞き手（読み手）へ。「はべり」は丁寧語。心内文では話し手＝思っている翁が主体で、丁寧語の対象は想定される聞き手（または自らの言葉を聞く読み手）。心内文も会話に準じて主体は翁。

問18 作者から帝へ。「候ふ」はここでは「お控えする・お仕えする」の謙譲語で、お仕えする相手＝御前にいる帝を敬う。地の文なので主体は作者。

問19 (1) 天皇（帝・上皇）に申し上げる場合に用いる特別な謙譲語。／(2) 作者から上（帝）へ。「奏す」は帝・上皇に「申し上げる」意の絶対敬語で、申し上げる相手＝上（帝）を敬う。地の文なので主体は作者。

問20 （例）どちらも会話文の中の言葉だから。〔会話文では敬意の主体は作者ではなく話し手になるため。〕

問21 傍線④「奉り」の受け手は母君、傍線⑫「たてまつり」の受け手は帝。いずれも「差し上げる」相手（受け手）を敬う謙譲語である。

問22 （例）地の文では敬意の主体は作者だが、会話文ではその話し手になる。たとえば①「御覧ず」は地の文なので作者から帝への敬意だが、③「たまへ」は翁の会話なので翁からかぐや姫への敬意となる。